

2015年12月、北の丸公園の東京国立近代美術館工芸館にて 「未来へつづく美生活展」開催！

東京国立近代美術館工芸館（館長：加茂川幸夫、所在地：東京都千代田区）は、2015年12月23日〔水・祝〕～2016年2月21日〔日〕「未来へつづく美生活展」を開催いたします。

所蔵工芸作品、約3,400点から厳選したガラス、金属、木工、染織など多ジャンルの名品約100点により、未来につないでいきたい、わたしたちが大事にしてきた「美生活」とは何かを検証します。

本展では、2つのセクションで「美生活展」のコンセプトにご賛同いただいた中原慎一郎 (Landscape Products)、皆川明 (minä perhonen) の両氏による工芸作品セレクト、インスタレーションが実現します。（※詳細別紙ご参照ください。）

宣伝美術をサン・アドの葛西薫氏 × 安藤隆氏が手がける豪華な構成となっています。



1920～2010年代 所蔵工芸品に見る「未来へつづく美生活展」

タイトルにある「美生活」とは、この展覧会のために創作した言葉です。今回の展示作品は古くは1920年代の工芸作品から近年までを展示します。1920年代といえば、古色蒼然としたモノクロームの世界を思い浮かべるかもしれません。しかしながら実際の作品をながめると現代の私たちの眼差しにも通じる未来への希望にあふれた新たな美を志向しています。戦争や高度成長など日本人の暮らし方が大きく変化するなかで、先人たちはどのような「暮らし」を思い描いて、身の回りの器や家具に、丁寧さ、丹念さを込めてきたのかをふりかえり未来につなぐ展覧会として構成しました。1930年代・40年代の当時における生活を垣間見るような絵画作品も交え、所蔵作品を中心とした約100点で構成します。展覧会の見どころを4つのポイントでご紹介します。

point 1

「丁寧な暮らし」は未来につながるメッセージ

生活の道具や衣服といった私たちをとりまくさまざまなモノに、自身の想いや時代の気分を反映させようと、今も昔も、工芸家たちは、素材や技法と真摯に向い続けています。

染織家の志村ふくみ(1924-)は、自ら染めた糸の色からインスピレーションを得たイメージを着物というかたちにし、一つの世界観を立ち上がらせています。

水煙すいえんとは、細かい水しぶきが煙のように見えることをいいます。この着物の制作にあたって、志村氏は、目前に広がる琵琶湖の水面に煙のように霧が立ちこめている、そんな情景を思い描いたのかもしれません。

この着物は、布を織る過程で、白糸のなかに藍色の濃淡で染めた色系を直感的に織り込んでいく作業から生まれます。水煙の情景が志村氏のなかで、独特の色系のグラデーションに変換されるのです。



志村ふくみ《紬織着物 水煙》1963年
広報用図版①



岩田藤七 《水指 彩光》1976年
広報用図版②

またガラス作家の岩田藤七 (1893-1980) は、昭和初期から茶道具のなかに、ガラスという新しい素材を持ち込み、時代の感覚をモノに反映しようと試みました。暮らしに寄り添うモノを静かに見つめ直し、「今」の感性をみいだし更新していく営みは、過去から未来へと私たちをつないでくれます。現代では、夏に涼を求めてガラスの茶碗が用いられることも見られるようになりましたが、ガラスの茶道具は今日においても一般的ではありません。東洋陶磁器で目を肥やし、「日本ならではのガラス」づくりをめざした岩田は、早くも昭和14年の個展でガラスの茶道具を発表しています。透明ガラスを最高の美とした当時の社会の常識的評価に挑戦し、宙吹き色ガラスにこだわり、「色の岩田」と言われ、色彩の巧みさが高く評価されました。

point 2

日本工芸作品に見る 1920 年代のモダンスタイル

技術革新がもたらした産業の発展にともない、車や飛行機、鉄道といった新しい移動手段が、人々の生活を大きく変えていった時代、それが1920年代でした。日本でも、欧米から入ってきた新しい生活スタイルが都市の若い人々の間で定着するようになる時代です。工芸家たちも、当時ヨーロッパで流行していたアール・デコやバウハウスによる機能主義のデザインをいち早く自身のスタイルに取り込んでいきます。新しい空気を取り込もうとしたモダンの先駆けの作品は、端正な表情のなかに、先鋭的な精神を秘めています。

東京美術学校（現・東京藝術大学）工芸科で鍛金を学んだ佐藤潤四郎（1907-1988）は、海外の新しいムーブメントに刺激を受けた日本の若手工芸家グループ「工人社」に入り、この時代の新しい素材であった「ガラス」を金属と併用することを示唆されました。そして、構造的な鉄の溶接にガラスを吹き込んだ作品を数多く発表していくこととなります。

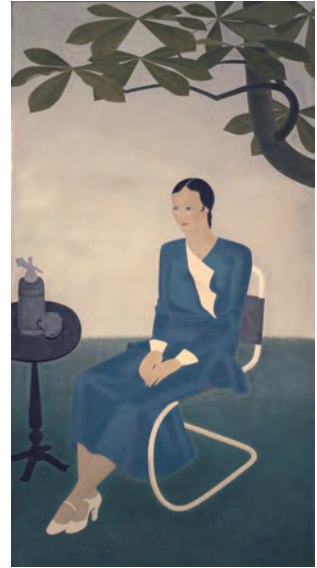
内側から押し出され、まるで風船のようにふくらんでいるガラスは、当時の人々の目にどのように映ったのでしょうか。



佐藤潤四郎 《鍛鉄硝子吹込花瓶》1940年
広報用図版③

point 3

海外のモダニズムの刺激 中原慎一郎氏とのコラボレーション



(左) ルーシー・リー 《青釉鉢》1978年 [広報用図版④](#)

(中央) マルセル・ブロイヤー 《肘掛け椅子》1922 - 24年頃 [広報用図版⑤](#)

(右) 吉岡堅二 《椅子による女》1931年 [広報用図版⑥](#)

世界各地から輸入された高価な材料を贅沢に使い手仕事で作られたアール・デコの家具と、対照的に大量生産された強靱な素材(鉄)を理知的に用いて構成されたバウハウスの家具。両者は装飾的な模様を廃し、すっきりとしたデザインという点で同時代的な共通点があります。機能主義の建築家に影響を受けながら自身の作風を確立させた陶芸家、ルーシー・リー(1902-1995)の作品も交え、インテリア・デザイナーの中原慎一郎氏によるセレクションと会場デザインで構成するコーナーを併設します。

中原 慎一郎 (NAKAHARA Shinichiro ランドスケーププロダクツ代表)

1971年、鹿児島県生まれ。ランドスケーププロダクツ代表。「Playmountain」「Tas Yard」「BE A GOOD NEIGHBOR COFFEE KIOSK」を展開。店舗設計業務、イベントプロデューサーなど多岐にわたり活動。

民藝運動の活動家であった浜田庄司の言葉で「生活者として優れた人」という表現があったのを思い出します。日常生活の中でどう暮らすことでそれに近づくのかを考えさせられました。今の自分にとっては程遠い道のりですが、非常に心に残る表現でした。

ここにあるルーシー・リーの佇まいにもそれが現れています。彼女から発するオーラもですがその背景の家具や調度品にもルーシー・リーの当時の気分がきちんと現れています。彼女の優れた暮らしづくりが伝わってきます。オーストリアの品性ある時代性が彼女の作風にもかなりの影響を与えていたのでしょう。当時の気分とはどんなだったのでしょうかね。

様々な写真や書籍、当時の調度品などみてもすごく皆ロマンチスト(?)だったのかなと思ってみたりします。そういう推測がぼくは楽しいです。なくなりつつある技術や手法、慣習もあって寂しく思うこともあります。しかしながら物が残っていることで推測することができます。かすかな手掛かりから新しいものが生まれるヒントを見つけられるかもしれない。そのヒントをもとにぼくらの周りの風景を美しくすることができるような気がします。



参考図版

写真提供：Crafts Study Centre,
University for the Creative Arts

point 4

工芸作品のある暮らしがひらく未来図

皆川明氏とのコラボレーション

各地の工場と連携して布作りからこだわり制作するファッション・デザイナーの皆川明氏。今回、皆川氏のデザインしたテキスタイルと呼応する所蔵作品をセレクトしていただき、テキスタイルと並陳します。自然、生活、日々の暮らしへのまなざしが、展示された作品をとおして交差し、あらたな光のもとで新しい姿を現します。展示作品をとおした、クリエイター同士のコラボレーションをご覧ください。

皆川明（MINAGAWA Akira 服飾ブランド「ミナペルホネン（minä perhonen）」代表）1967年、東京都生まれ。オリジナルデザインのテキスタイルによる服作りを特徴としている。ブランド名はフィンランド語で「minä」は「私」、「perhonen」は「ちょうちょ」を意味する言葉。蝶の羽のように軽やかで美しい図案を作っていきたいという願いがこめられている。



前大峰 《沈金蝶散模様色紙箱》（蓋表）1959年
広報用図版⑦

黒い漆面にふわりと舞い上がるような蝶の群れ、そのわずかな羽の凹凸や、模様グラデーションなど、ひとつの面として見える部分も、実際は小さな点の粗密によって表現されています。

漆を塗った上に沈金刀で細かい溝を彫り、そこに金を沈めて模様を描く、「沈金」は長い間、主に線描の技法として用いられてきました。作者の前大峰（1890～1977）は、明治の中頃から新聞にも登場するようになった、印刷写真の網点あみてんに着想を得て、沈金に新たに点彫という要素を見いだします。線と点の緻密で繊細な重なりによって、動物の毛並みや植物の筋、そのかすかな陰影など、自然のモチーフをより立体的に、質感豊かに表しました。



ミナペルホネン 《sky flower》2012年 参考図版

冴えるブルーのラインが冬の空の凜とした冷たさを思わせる蝶々。それらは小さな丸の連なりや、花のめしべのような細かい線、重なりが陰影を表す線など様々な刺繍で構成されています。

カシミア混のウールの生地が、刺繍ならではの線の動きを柔らかく受け止め、手描きの表情を写しとり、ドローイングは手で触れ、身にまとうことのできる服へ組み立てられていきます。

タイトルのsky flowerには「蝶々は空を舞う花のよう」という、蝶に対する印象と愛着とが投影されています。旅を通じて、想像力や使い手の思い入れのような、個人的な感情がデザインに与える永続性について再考した皆川氏が描く、「絵の服」と題された一連の物語のようなテキスタイルのひとつです。

開催概要

「1920～2010年代 所蔵工芸品に見る 未来へつづく美生活展」

Longing for Modernity: The 1920s–2010s from the Crafts Gallery's Collection

会期 : 2015年12月23日[水・祝]～2016年2月21日[日]

休館日 : 月曜日(1月11日は開館)、

年末年始(12月28日[月]-2016年1月1日[金・祝])、1月12日[火]

開館時間 : 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

会場 : 東京国立近代美術館工芸館

Crafts Gallery, The National Museum of Modern Art, Tokyo

主催 : 東京国立近代美術館

観覧料 : 一般210円[100円]、大学生70円[40円]

* []内は20名以上の団体料金(消費税込)。

* 高校生以下および18歳未満、65歳以上、MOMATパスポートをお持ちの方、友の会・賛助会会員、キャンパスメンバーズ、障害者手帳をお持ちの方とその付添者(1名)は無料。

* 入館の際、会員証、学生証、運転免許証等の年齢のわかるもの、障害者手帳をご提示ください。

無料観覧日 = 2016年1月2日[土]、1月3日[日]、2月7日[日]

アクセス : 東京メトロ東西線 竹橋駅(1b出口) 徒歩8分

東京メトロ東西線、半蔵門線、都営新宿線 九段下駅(2番出口) 徒歩12分

所在地 : 〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園 1-1

< 報道関係の方のお問い合わせ先 >

東京国立近代美術館工芸館(展覧会担当 北村、広報担当 高橋)

TEL 03-3211-7781(工芸課直通) E-mail: koge-pr@momat.go.jp

< 掲載用のお問い合わせ先 >

TEL: 03-5777-8600(ハローダイヤル) <http://www.momat.go.jp>(公式HP)

FAX : 03-3211-7783 (工芸課) 広報担当 行 発信日 年 月 日

<input checked="" type="checkbox"/>	No.	
	1	志村ふくみ《紬織着物 水煙》1963年
	2	岩田藤七《水指 彩光》1976年
	3	佐藤潤四郎《鍛鉄硝子吹込花瓶》1940年
	4	ルーシー・リー《青釉鉢》1978年
	5	マルセル・ブロイヤー《肘掛け椅子》1922-24年頃
	6	吉岡堅二《椅子による女》1931年
	7	前大峰《沈金蝶散模様色紙箱》(蓋表) 1959年

※作品はすべて東京国立近代美術館蔵。

- ・ご希望の図版の左枠内に✓を入れてFAXでお送りください。
- ・作品図版はJPEGデータをご用意しています。
- ・展覧会広報のみにご使用ください。著作権保護のため、他の目的でのご使用は固くお断りいたします。
- ・掲載見本を広報担当者へご寄贈ください。(Webサイトの場合は掲載時にお知らせ下さい)

ご担当者名 : _____ E-mail : _____

貴社名 : _____

出版物・放送番組・ウェブサイト名 : _____
 URL (http://www _____)

掲載予定号・発行日/放送・公開日時等 : _____

電話番号 : (_____) Fax: (_____)

* 展覧会をご紹介いただける場合は、読者プレゼント用招待券をご用意いたします。

希望しない/希望する (_____ 組 _____ 枚)

〒

チケット送付先 : _____

【報道関係の方からの本資料に関するお問い合わせ先】
 東京国立近代美術館工芸館 広報担当/高橋 TEL:03-3211-7781 (工芸課直通)
 E-mail: koge-i-pr@momat.go.jp HP: http://www.momat.go.jp

※工芸館広報のアドレスが新しくなりました。